

初めての研究休暇から続く「違和感」に満ちたトホホな日々

結城 俊哉（福祉学科教員）

今は、8月の下旬を迎えている。僕は「熱中症」が不安で外出をひかえているが、真夏の炎天下でも汗だくになりながらもマスクを着けて誰もいない道路を黙々と歩いている人を見かけることがある。ワクチン接種についても、感染の重症化を防止するから早く接種したい人もいる。その一方で、「mRNAワクチンは信用できない、なんだか怪しいから接種はしない」とか、「自己免疫力を高めればコロナは退散する」という加持祈祷的な信念を持つ人まで出現する始末の昨今。

その背景には、何やらさまざまなデマや噂や、専門家であるはずの医師の信憑性に疑問のある言説までもがSNSなどインターネットの世界を通して怪しげな情報として市井の人々の間を駆け巡っている。なんだろう、この違和感の正体は。

僕は、田舎に住む高齢の両親に会いたい気持ちから、先日ワクチン接種（2回目完了）。そして、翌日の早朝から、激しい頭痛、倦怠感、38・5度の発熱（10年ぶり）の「副反応の出現」で青息吐息の状態に堕ちました。（翌日の朝には、何とか回復したのですが…）

そして今、『まなびあい』誌のエッセイを書こうとして昨年の研究休暇（1年間）の日々を思い出そうとするのだけれど、どうも何も思い出せない。もう既に始まっている認知症の症状なのかもしれないが、去年1年間は時間が停止したままのように思える。よくよく考えてみると、毎日の時間の流れや日常の出来事が平坦で、モノトーンで、家族以外の人間とリアルに会うこともなかった。確かに、時々、オンライン（Zoom）でパソコンの画面上で話し合う程度だった。移動の手間が無いのととても便利なのだがオンラインから退出した後のプーンとした感覚の中で、あれ？はてな？さっきは誰と会話したのか実感が無い。次第に出会った印象が希薄であることを自覚し始めていた。そんな日常に違和感を感じていた日々。

たまたま立ち寄った近所の書店で、精神科医のアンデシュ・ハンセン著（久山葉子訳）（2020）『スマホ脳』新潮新書を購入して「読んだこと」だけが何故かなんとか思い出せる。この本は、スマートフォンを手に持ち日常的に使い続けることによって生じる症状は、ギャンブル依存症・覚醒剤依存症・アルコール依存症とおなじで「スマホが手放せなくなる依存症」を引き起こし、「脳」が変化するため、集中力や学力（IQ・記憶力）の低下、睡眠障害、うつ症状の発症などのトリガー（銃爪）と

なると警鐘を鳴らす内容の本だった。新型コロナ感染防止キャンペーンで「テレワーク」が推奨されている最中に『スマホ脳』を読んで以来、狭い自宅に自分の書齋なるものを持ったことが無い僕は、仕事をするためには、必然的には外出（近所の図書館か喫茶店のハシゴを）することになる。そして、日常的に移動が多い生活なので「乗換案内」のスマホアプリの便利さに感謝している。しかしながら、スマホやパソコンなどのデジタル機器は確かに便利で使い方次第ではあるが、それと引き換えに自分の中から何かじわじわ喪失していくものがあるような気がしてならない。なんだろう、この違和感の正体は。

昨年度（2020年）コロナ感染状況下の「研究（自粛）休暇」だった僕は、研究休暇を終えて今年（2021年）の4月から「明けまして、おめでとう！」という充実感・達成感に満ちた祝祭的な気分になれるはずもなく、四苦八苦しながら「オンライン授業」なるものに取り組んだ。学生たちともリアルなコミュニケーションを交わすことも難しく、時々、Zoomの機能を活用しつつPowerPointやYou Tubeの動画配信を共有しながら授業や演習（ゼミ）もするのだけれど、何か手応えが乏しい。

学生達も大学のキャンパス生活なるものを経験することができずに「孤立感だけが募る気分」だと言う。しかし、オンライン授業だとキャンパスへの通学や教室の移動が無いため受講することが「気楽な様子」でもある。僕も学会の全国大会などは今はオンラインでの開催がほとんどで、開催地までの移動や宿泊の手間も無いので「気楽に・気軽に」参加することができる。しかし、地元を観光することも、地元の名物を食することもできない。僕にとっては、学会の全国大会に「参加した感」が限りなく「ゼロ」に近いのである。この「気楽さ・気軽さ」に何か僕は違和感がある。

そして、今も続く新型コロナ感染防止の「新しい生活様式」に基本的に未だに慣れない。まず「三密」にならない関係性が理解できない。「マスク」して会話するため「表情」が読み取れないので、目の前の人とまるで「電話」か「インターホン」越しで話をしているようで理解が深まらない。さらに、対人関係において「ソーシャルディスタンス」という人と距離を保って生活するなんてできるのだろうか。確かに、最近は「ハラスメント」問題もあるので、相手とのディスタンスは必要なのだが、それだけでもない気がする。一体なんだろう、この違和感。

さらに、昨年の4月以後、よく耳にする延長戦に何度も突入する「緊急事態宣言」という言葉の定義というかその意味が最近よくわからなくなっている。「（国民のみなさん！）生命を守るために、不要不急の外出・移動は止めて下さい。飲食店の営業時間は午後8時まで、お酒の提供は禁止して下さい」という「お願い宣言」のようなのです。不要・不急の意味も、理解できない。当事者にとっては、必要・至急なのである。

しかし、文芸評論家の斎藤美奈子氏曰く「それにしても、先生たちが不要不急の行為を何やらコソコソやっているようでは、まるで、校則だけがやたら厳しい学校みたいで、そのうち生徒達はグレしてしまうかもね」と東京新聞の『本音のコラム』を読んだ時になんだか深く頷いてしまっていた。たしかに、最近の様子をみると現実には斎藤氏の予言どおりになっている気がするのは僕だけかな。

またさらに、昨年からはほとんどの学校行事「修学旅行・運動会・文化祭」がコロナ感染防止の観点から禁止されて来たにも関わらず、昨年（2020年）から延期されていたオリンピック・パラリンピックが、多くの国民の「心配・不安・懸念」を振り切り強行開催された。主催者は「アスリートの選手達はプレイブック（行動ルール指針）を厳守する完全隔離のバブル方式なので、コロナ感染拡大の要因とはならないので、国民の生命と健康が守れる」との判断から「オリ・パラ」を開催したようなのです。でも、ある感染症の専門家は、「普通は開催する状況ではない」とまで言っていたけど、でもここまで来るとこの「普通」の意味の定義はなんだろうか。主催者側の目論見は「日本がメダルをたくさんGetすれば、オリンピックは開催してよかったね。みんなで感動したよね。」という空気（世論）になるのかと思いきや、その期間に感染力の強いデルタ株の本土上陸もあり爆発的なコロナ感染拡大状況を招いたため、医療崩壊してしまい、コロナ感染しても入院もできず自宅待機するしか無い状況に追い込まれている。現在も、ワクチン接種だけを急ぐだけしか打つ手がない。某担当大臣は、「十分に供給できるワクチンは準備が整っている」とは言うだけで、具体的なことについて何も言わない。この「違和感」はなんだろう。

それにしても…、デジタルが苦手な高齢者にはワクチン接種のオンライン予約を推奨しながら、若者たちに予約無しでワクチン接種ができると謳い文句を掲げてみたら、真夏の炎天下の渋谷の街に彼らを並ばせて抽選券を配布するという状況を報道で知り、僕は、正直、愕然&唾然とした。このなんとも言えない不快な気分を招くアナログな方法へのこの違和感は何だろうか。若者たちこそ、オンライン予約でワクチン接種を優先させるべきなんじゃないのか。

最後に、パラリンピックの競技試合もオリンピック同様に「無観客試合」のはずなのに「障害のあるアスリートが活躍する姿を観ることは感動的で、共生社会を考える教育的意義がある」と掛け声をかけて「別枠」として学校の生徒たちを試合会場で観戦（＝「学徒動員」）させるといふ。「障害者福祉」の教育と研究を担当している立場の僕としても不愉快極まりない日々を過ごしている。アスリートは、戦時中でもあるまいし「お国のため」に競技するわけもなく、パラ・アスリートは、「感動させる」ために競技しているわけでもないはずなのに。この「違和感」の正体は何だろうか。

『まなびあい』のエッセイとしてここまで書きながら、さまざま「違和感」が延々

と続くトホホな日々が、未だに終わる様子も無いようです。しかし、一日も早いコロナ感染症の収束が到来する「その日」まで、みなさんと一緒に「こころと身体」を健やかに保ちながら過ごして「生きたい」と思います。

ここまで、僕の徒然なエッセイを最後まで読んでくださった方には、衷心より感謝申し上げます。お互い元気で参りましょう。

Good Luck!!